

林業の基本作業と木材の行き先

●製材用

利用量が最も多く、材積(木材の体積)あたりの価値が最も高くなる、名実ともに木材利用の「柱」となる用途です。丸太から板材や角材を作りだし、一般住宅の他、最近では公共建築物用としても多く使われています。



●合板用

丸太をかつら剥きの要領で薄く切ってきた板(単板)を複数枚張り合わせて出来た板を合板と呼びます。建物の構造材として使われるほか、コンクリートの型枠用の物もあり、様々な規格が存在します。



●チップ用

曲がっていたり、細かったり、製材用や合板用には使えない木材の使い道です。丸太を削ったり砕いたりしてチップを作り、紙の原料としたり、板状に接着して作る木質ボードの原料として使われます。建築廃材から作られるチップと違い、釘などの異物混入や、残存薬剤の心配がありません。



●燃料等用

チップ用と同様、製材用や合板用には向かない木材のその他の用途です。地球温暖化が叫ばれる中、再生可能エネルギーとしての木材利用が注目されています。チップそのものや、ガス化させたものを燃料として発電する木質バイオマス発電所が各地で建設され、稼働しています。発電するだけでなく発生する熱も利用する熱電併給システムの普及も期待されます。



このほか、昔ながらの薪としての利用や、チップよりも細かい「おが粉」を圧縮してできた燃料「木質ペレット」の製造、キノコ栽培の原木や菌床用のおが粉製造などにも木材が使われています。



地球温暖化や土砂災害の防止への期待が高まっている林業ですが、本来の目的である木材生産を忘れてはいけません。二酸化炭素を吸収してできた木材をより多く、より長く使っていくことが、地球温暖化防止につながります。ここでは、林業で生産される木材がどのように使われているのか、紹介していきます。

6.7万m³
(44%)

新潟県内の
素材生産量
(H28年度)

15.2万m³

2.3万m³
(15%)

1.7万m³
(11%)

4.5万m³
(30%)



林業における「素材」って？

一般的に「素材」と聞くと「天然素材」や「新素材」などの言葉が思い浮かび、材料や原料を意味するものとして認識されているのではないのでしょうか。しかし、林業における「素材」は、木を伐って枝を落とし適当な長さに切りそろえたもの、つまり「丸太」そのものを指しています。林業では「素材生産量」や「素材生産業者」という言葉が当たり前のように使われていて、一見すると何の材料の生産量・生産業者なのだろうかと思う人もいるかもしれませんが、それぞれ山から伐出された丸太の生産量とその生産業者を指していますので覚えておきましょう。

林業は木を植え、育て、収穫し、そしてまた植えてという作業を数十年かけて繰り返していく仕事です。苗木を植え、豊かな森林にするために、下刈り、枝打ち、間伐の作業を通して持続可能な森林管理を行います。近年では、二酸化炭素の吸収による地球温暖化防止や土砂災害の防止に対する期待が大きく、森林の整備、保全が林業の重要な役割の一つとなっています。



地拵え(じごしらえ)

植栽するための準備作業。伐採跡地に残った枝葉等を集め、筋状に配置するなどして、植栽しやすい環境にします。



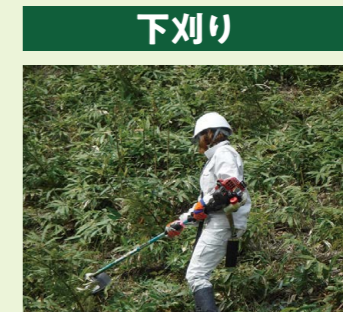
植栽

苗木を植える作業。1本1本、人の手でいねいに植え付けます。



主伐

収穫を目的に伐採する作業。主伐できる大きさに育つまでに、50~80年もの年月が必要。伐採後の木はトラックで運び出され、適材適所で使われます。



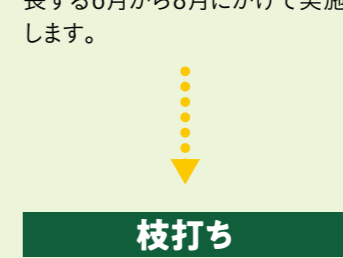
下刈り

日光を遮り植栽木の成長を妨げる草木を刈り払う作業。植栽後5年から10年程度、草木がよく成長する6月から8月にかけて実施します。



間伐

成長して混みすぎた森林を適正な密度に導くために、一定の割合で育成木を伐倒して間引きをする作業。利用できる大きさに達したものは搬出して出荷します。



枝打ち

節のない優良な材を作るために行うが、雪害の防止や病虫害からの保護などの効果もあります。木の成長休止期となる晩秋から早春にかけて行います。

数値出典：平成28年度木材統計(農林水産省)、新潟県林政課調査